南張貝塚（第 1、2、3 次）発掘調査報告

－三重県志摩市浜島町南張所在－

２０１０（平成２２）年３月
三重県埋蔵文化財センター

南張貝塚遠景（北から）

南張貝塚遠景（北から）

1. ヒト左頭頂骨～後頭骨(骨1)　2. ヒト右頭頂骨(骨3)
3. ヒト前頭骨(骨2)　4. ヒト右頬骨～上顎骨(骨10)
5. ヒト下顎骨(骨4)

出土骨（1）

6. ヒト右上腕骨(骨6)
7. ヒト左鎖骨(骨8)
8. ヒト肋骨(骨14)
9. ヒト仙椎(骨16)
10. ヒト左上腕骨(骨7)
11. ヒト左橈骨(骨21)
12. ヒト尺骨(骨20)
13. ヒト基節骨(骨19)
14. ヒト右大腿骨(骨15)
15. ヒト右大腿骨(骨5)
16. ヒト左大腿骨(骨9)
17. ヒト左踵骨(骨17)
18. ヒト左第2中足骨(骨13)
19. ヒト左第3中足骨(骨12)
20. ヒト不明(骨18)
21. ヒト不明(骨22)
22. コウイカ科貝殻(骨11)

序

三重県志摩市は、全国有数のリアス式海岸で知られますが、場所によっては波穏やかな砂浜もあります。志摩市浜島町南張は、風光明媚な砂浜に面する集落です。地元の神社には、大波が張りよせる土地であることから「ナミハリ」と名付けられたという伝承が残っています。

この集落内には、中世の土器が出土する南張貝塚があることが知られていました。今回の発掘調査は、集落内排水整備事業に伴って行われたもので、開発に伴う緊急調査です。我々が現代社会をより豊かに暮らすためには、開発は必要不可欠なものです。その一方で地域の歴史を語る遺跡が失われていくにあたり、これらを記録保存し、後世に伝えていくのも我々の使命です。今後は、こうして蓄積された成果をより多くの人々に有効に活用されるように努力していきたいと考えております。

なお、最後になりましたが、調査にあたりましては地元の方々をはじめ、志摩市教育委員会、三重県農水商工部には多大なるご理解とご協力を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

平成２２年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　河北　秀実

例　言

１．　本書は、三重県志摩市浜島町大字南張にある南張貝塚の発掘調査の報告書である。

２．　調査の原因は、平成19・20年度の中山間地域総合整備事業（広域連携型）志摩地区による集落排水整備事業である。調査等にかかる費用は、三重県農水商工部が負担した。

３．　当該調査及び整理体制は下記のとおりである。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

【第１次調査】　調査研究Ｉ課　主事　柴山圭子　臨時技術補助員　山本達也

【第２次調査】　調査研究Ｉ課　主幹　木本勝己　主査　西村美幸

【第３次調査】　調査研究Ｉ課　主幹　木本勝己　主査　西村美幸

発掘調査作業体制　伊勢農林水産商工環境事務所の労務提供

整理担当　　三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ｉ課・情報普及課・支援研究課（平成19・20年度）

調査研究Ｉ課・活用支援課（平成21年度）

４．　調査期間及び調査面積は下記のとおりである。

【第１次調査】　平成20年２月６日～平成20年３月12日　88㎡

【第２次調査】　平成20年４月22日～平成20年７月２日　535㎡

【第３次調査】　平成20年11月19日～平成21年３月23日　739㎡

５．　調査にあたっては、地元の方々、志摩市教育委員会、三重県農水商工部農業基盤室、伊勢農林水産商工環境事務所、及び鳥羽警察署のご協力を得た。

６．　報告書の執筆は木本、西村が、全体の編集及び遺物写真撮影は西村が行なった。

７．　本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

凡　例

＜地図類＞

1　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、中山間地域総合整備事業（広域連携型）志摩地区の工事図面である。

2　挿図の方位は、世界測地系・測地成果2000による座標北で表している。なお、この地域の磁北は真北に対して６°30´西偏している。（平成11年国土地理院）

＜遺構類＞

1　土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（1999年版）を用いた。

2　本書で使用した遺構表示略号は下記のとおりである。

ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑　Ｐｉｔ・Ｐ：柱穴・小穴

＜遺物類＞

1　当報告での遺物実測図類は実物の１/４を基本としている。

2　遺物実測図は、各遺跡ごとの通番としている。

3　当報告書での用語は、「わん」は「椀」に統一している。

4　出土遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号　・・・・・・・・・・・・・・・・　出土遺物実測図掲載番号である。

実測番号　・・・・・・・・・・・・　実測段階の登録番号である。

様・質　・・・・・・・・・・・・・・　「陶器」「土師器」などの区分をここに示した。

器種など　・・・・・・・・・・・・　遺物の器種を示した。

新調査坑番号　・・・・・・・・　報告書掲載時に整理した調査坑番号を記した。

旧調査坑番号　・・・・・・・・　発掘調査時の調査坑番号を記した。

遺構・層名等　・・・・・・・・　遺物の出土した遺構名や層名などを記した。

大きさ（㎝）　・・・・・・・・・　遺物の大きさを示す。（口）は口縁部径、（底）は底部径、（高台）は高台部径、（高）は器高を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での接地点ではない。

調整・技法の特徴　・・・・　主な特徴を示した。「Ａ→Ｂ」はＡの後にＢが施されたことを示す。

胎土　・・・・・・・・・・・・・・・・　小石などの混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調　・・・・・・・・・・・・・・・・　その遺物の代表となる色調を記載した。表記は前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存度　・・・・・・・・・・・・・・　その部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分を示す。

特記事項　・・・・・・・・・・・・　遺物の特徴となる事項を記した。

＜写真図版＞

1　写真図版は、遺構・遺物毎でまとめた。

2　出土遺物実測図と写真図版の遺物番号は対応している。

3　遺物の写真図版は、縮尺不同である。

本 文 目 次

第１章　前　言
１　調査の契機 …… １
２　調査経過 …… １
３　調査の記録と方法 …… １
４　文化財保護法による諸通知 …… ２

第２章　位置と環境
１　地理的環境 …… ３
２　歴史的環境 …… ３

第３章　遺構
１　基本層序 …… １０
２　遺構の概要 …… １０

第４章　遺物
１　ＳＤ２出土遺物 …… １４
２　ＳＫ３出土遺物 …… １４
３　ＳＫ４出土遺物 …… １４
４　ＳＫ５出土遺物 …… １４
５　黒褐色土出土遺物 …… １４
６　表土、攪乱等出土遺物 …… １４

第５章　自然科学分析
１　自然科学分析の目的 …… １８
２　第３次調査出土骨の同定 …… １８

第６章　調査のまとめ
１　ＳＫ５出土の土師器皿について …… ２１
２　人骨の出土について …… ２１
３　結語 …… ２１

図 版 目 次

第１図　遺跡位置図 …… ６
第２図　調査坑配置図 …… ７
第３図　調査坑配置図（拡大図） …… ８
第４図　遺構平面図・断面図 …… １１
第５図　土層断面図 …… １２
第６図　出土遺物実測図 …… １５
第７図　人体骨格各部の名称と出土部位 …… １９
第８図　江戸時代後期の南張村 …… ２２
第９図　江戸時代の道等の復元案 …… ２２

表 目 次

第１表　調査坑一覧表 …… ９
第２表　遺構一覧表 …… １０
第３表　土層名称 …… １３
第４表　出土遺物観察表（１） …… １６
第５表　出土遺物観察表（２） …… １７
第６表　骨同定結果 …… ２０
第７表　出土人骨の歯式 …… ２０

写 真 図 版 目 次

巻頭写真図版　１　南張貝塚遠景
巻頭写真図版　２　出土骨（１）
巻頭写真図版　３　出土骨（２）
写真図版　１　ＳＤ１・２、調査坑49小穴 …… ２５
写真図版　２　ＳＫ３、ＳＫ３断面 …… ２６
写真図版　３　ＳＫ５、作業風景 …… ２７
写真図版　４　出土遺物 …… ２８

第１章　前　言

１　調査の契機

南張貝塚は、志摩市浜島町の西、大字南張の集落のほぼ全域にわたる遺跡である。昭和44年に集落西部で須恵器片等を表面採集していて、その年に小字山の腰一帯の遺跡登録がなされている。貝塚というように、この集落西北部を中心とした畑地脇などに、農作業時に地中から掘り上げられて除けられたと考えられる多数の貝殻片が確認される。

この南張において、平成18～21年度に中山間地域総合整備事業（広域連携型）志摩地区による道路下の新設下水管埋設が、集落のほぼ全域（南半部を除く）に渡って行われることになった。

平成18年度は、集落地北西部の南張生涯学習センター付近の集落内道路での下水管埋設が行われたが、事業担当部局である、伊勢農林水産商工環境事務所農村基盤室志摩基盤整備課との協議の結果、遺跡の範囲確認調査が工事立会も兼ねて行われることとなった。この結果と、同時期に行った集落内全域の分布調査で、中世の土師器片等の遺物散布が集落内全域にわたっているということから、集落内全域が遺跡範囲となることが分かったので、遺跡範囲を集落のほぼ全域に変更した。

遺跡範囲が集落全域であることから、続く平成19年度以降の工事時には発掘調査を行うこととなった。しかし、狭い集落内道路に幅約0.8～1.5m、深さ約0.5～３ｍを掘削して管を埋設すること、また工事範囲はその日のうちに埋め戻さなければならないという工事方法の制約があった。このため担当部局との協議の結果、調査は埋設管を埋めるまでの工事掘削に随時立会って調査していくという方法をとることになった。

調査の期間は、以下のとおりである。

第１次調査　平成20年２月６日～３月12日
第２次調査　平成20年４月22日～７月２日
第３次調査　平成20年11月19日～翌３月23日

なお、第３次調査中に、人骨の可能性がある頭骨が出土した。工事中の重機掘削中の出土であり、出土遺構などが不明であったため、万一事件性がある可能性を考慮して地元鳥羽警察署に届け出をした。三重県警察での鑑定の結果、この骨は古いものであり、事件性がないと判断されたため、文化財として埋蔵文化財センターが保管することとなった。

２　調査経過

調査の概要は、以下のとおりである。

＜第１次調査＞平成20年度
２月６日　調査開始　近世陶器片出土
３月12日　四面矢板で土層確認できず
＜第２次調査＞平成21年度
４月22日　調査開始。
５月21日　Ｐｉｔを確認
５月22日　ＳＤ1を確認
５月23日　ＳＤ２を確認
５月30日　Ｐｉｔを確認
６月10日　ＳＫ３・４を確認
６月11日　Ｐｉｔを確認
６月16日　ＳＫ５を確認
　　土師器小皿が多数出土
６月17日　Ｐｉｔを確認、落ち込み確認
７月２日　調査終了
＜第３次調査＞平成21年度
11月19日　調査開始
１月20日　骨片出土
３月３日　掘削終了
３月16日　座標の振り込みを行う

３　調査の記録と方法

（１）掘削の方法

新設管埋設工事を行う中での調査を行うこととなったため、工事に用いる重機のバケットは、遺構が確認しやすいように、平爪バケットとした。

重機による掘削は、遺構や遺物が確認された時に対応できるように、埋蔵文化財センター職員の立会いのもと、数㎝ずつ徐々に掘り下げた。そして、遺構や遺物が確認された時及び、遺構・土層の記録作業が必要な時などは、重機による掘削を一時中断して、作業員または調査担当による、手作業に切り替えての掘削を行った。

（２）調査箇所

調査箇所は、分布調査の結果と古絵図等の記録もふまえ、また、すでに調査した箇所の土層や遺構存在の状態、既設管の埋設による攪乱の状態も考慮したうえで、遺構・遺物存在の可能性が高いと思われる地点を調査箇所とした。そのため、工事で掘削した箇所全部を調査しているわけではない。調査箇所は、第２・３図及び第１表に示した。

（３）記録方法

調査現地での記録は、各調査坑ごとに、40分の１縮尺の方眼と筆記欄のついた遺構カードに、調査箇所の平面図・土層断面図・遺構平面図・出土遺物の状況等を記録した。このため、通常使用する調査作業日誌は作成しなかった。また、土層断面図については、場所によっては、２㎜方眼紙に20分の１縮尺で書いたものもある。これらの遺構関連の図面類は、報告書作成段階で縮尺を統一し、100分の１の縮尺で掲載した。

（４）写真撮影

調査現地での遺構・土層・作業風景等の撮影は、３５㎜カメラを使い、モノクロネガフィルムとカラーリバーサルフィルムを使用した。補助的にデジタルカメラも使用した。一部、ブローニー版のモノクロネガフィルムとカラーリバーサルフィルムを使用した箇所もある。

報告書掲載用遺物の撮影は、ブローニー版モノクロネガフィルムを使用した。

４　文化財保護法による諸通知

文化財保護法にかかる諸通知は以下により行った。

・　三重県文化財保護条例第48条第１項にかかる発掘通知（県教育長宛県知事通知）

　平成19年12月３日付　勢農環第9-51号（第１次調査・第２次調査）

　平成20年10月15日付　勢農環第4080号（第３次調査）

・　文化財保護法第99条第１項にかかる発掘実施報告（県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知）

　平成20年２月８日付　教埋第372号（第１次）

　平成20年４月23日付　教埋第39号（第２次）

　平成20年11月20日付　教埋第336号（第３次）

・　遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（鳥羽警察署長宛県教育長通知）

　平成20年３月21日付　教委第12-4-38号（第１次）

　平成20年９月17日付　教委第12-4410号（第２次）

　平成21年３月27日付　教委第12-4453号（第３次）

　平成21年５月12日付　教委第12-4404号（第３次骨）

（木本）

第２章　位置と環境

１　地理的環境

志摩市浜島町は志摩市の西部に位置する。この町内の海岸は、東部の入り組んだ内湾を伴うリアス式海岸と、西部の外洋に面する断崖地帯とに分かれるが、その西部のほうには断崖地帯を東西にして開けた風光明媚な砂浜があり、現在は南張海浜公園となっている。

大字南張の集落は、その南張海浜公園の北側の、標高２～５ｍの海岸部の砂堆上に立地している。集落の周囲は北、東、西とも低い丘陵に囲まれている。これらの丘陵の谷間からは、北西からは湯夫川が、北東からは２級河川南張川が流れ、それらが南張集落の東で合流して前川となり、集落の南を西に流れて南張海浜公園西部より海に注いでいる。集落域は、これらの川によって北・東・南側をぐるりと取り囲まれる形となっている。集落の北西と北東には南張川と湯夫川の流域に広がった細長い平地が続き、米作、畑作、特産品であるハウスメロン栽培などが行われている。

南張集落の地質は、河川の堆積作用によると思われる細かい褐色系の砂の下に、灰白～黄灰色系の粗い海成砂が堆積し、これらの砂層の下の基盤地質は砂岩、泥岩、礫岩からなっている。基盤地質が形成されたのは地質学的には中世界に属する。

２　歴史的環境

（１）南張の地名の由来

南張地区に限った郷土史は見あたらないが、『浜島町史』には、浜島町内の各字の各時代の記述が随所に見られるので、『浜島町史』を中心的な参考文献として、南張についての江戸時代頃までの歴史の概略をみてみよう。

南張の集落の由来については、集落内にある楠御前八柱神社の由緒書にそれに関するものがある。この神社は、明治40年に楠御前神社、村社であった八柱神社などを合祀したものである。楠御前神社に関する内容の中に、記紀伝承上の時代、景行天皇の皇女久須姫命がこの地に住んだが、里人達が没後に墓を築き楠樹を植えて祀ったのがその神社の起源であって、また、久須姫命がこの地を大波が漲りよせる明媚な土地であることから、「ナミハリ」と名つげたのが始まりとするとある。これは、南張の語源に関する説でもある。江戸中期に記された『三国地志』にも、波に関する風光明媚さから「ナミハリ」とついたとある。実際に南張海岸より望む景色は、この地の呼称がこのようになったことを彷彿させる。

ところで、「南張」という表記については、「隠れる」の意味を表す動詞「なばる（名張る）」が名詞化した「名張」が元になっていると考えることもできる。東西に箱田峠、鳥越峠、北に、奥山、明神山等の山地でかこまれ、ひっそりと居住するように集落があるところから名づけられたとも考えられる。「隠れる」が語源となったとする説には、志摩地域に伝わる平家落人伝承との関連も考えられている。

（２）南張の歴史

古代

大化の改新（645）後の国郡制の制定では、志摩国は、搭（答）志郡、英虞郡の二郡に分けられた。南張は英虞郡にあたる。この当時の英虞郡の範囲については、鎌倉時代の伊勢神宮御領地等をあらわした『神鳳鈔』によると、古代～中世前半を通じ、東は阿児国府から英虞湾、さらに熊野灘浦々から九木浦までにも至る長大な土地であったことが分かる。

中世

浜島町近隣の南伊勢町などには平家落人がすみついたという謂われのある字も多いが、浜島町においては南張、桧山路、塩屋が該当する。

南張の地名の記録としての初出は、荘園の発達と関連した記録である。志摩国の荘園の発祥は不詳だが、平安時代には、荘園の発達をみたと考えられており、南張は伊勢神宮の荘園「奈波利御厨」として出てくる。

南張に関して『三重県の地名』（平凡社刊）には、「奈波里（「公文翰林抄」神宮文庫蔵）とも記し『神鳳鈔』に「奈波利御厨」とある」と記されている。

「奈波利御厨」については、『日本地名大辞典』（角川書店版）には、「鎌倉期～室町期に見える御厨名で、『神鳳鈔』志摩国のうち、『公文抄』『公文書初心抄』に「奈波利検校一疋」とみえるが、正安４年の室町院御領目録に、伊勢の国、「奈波利御厨」とある。」と記されている。

つまり南張は、鎌倉期は伊勢神宮荘園の「奈波利御厨」であった。しかし、鎌倉末期、承久の乱の後は荘園制が崩れたことにより、伊勢神宮領から後鳥羽上皇方の室町院領となり、その後、南北朝以後には、室町院領が衰えたことにより伊勢国司北畠の領有地となる。

ところで、明応７年（1498）には紀伊・東海道全般・甲州房総に至るマグニチュード8.6の大地震があり、10～20メートルの津波をともない伊勢志摩で約一万人が亡くなったという。町内の塩屋地下文書にはこの被災の記録が残っている。位置的に考えて南張も何らかの被害があったことが推測されうる。

応仁の乱後、永正（1504～）年代より志摩国も群雄割拠の時代に入るが、その中には浜島城を築いた小野田筑後もいる。浜島城主に関する事柄は、（『浜島村地誌』（1884）などには度々出てくる。史実に乏しく伝聞の域を出ないものも多いが、南張にも関係するのでまとめると次のようになる。

小野田筑後は、浜島村など５ヶ村を支配したが、その一つに南張村も含まれる。彼は、永禄３年（1560）、九鬼嘉隆が兵を起こし志摩平定を始めるや、いち早く九鬼の軍門に下る。九鬼嘉隆は後に鳥羽城を築き初代城主となる。

九鬼氏に従ってより、浜島城主には浜島豊後の名が出てくる。浜島豊後は、関ヶ原合戦では九鬼嘉隆とともに、石田三成の西軍についた。嘉隆の子で２代目鳥羽城主であった九鬼守隆は徳川家康の東軍についた。関ヶ原合戦後は、鳥羽城は九鬼嘉隆が入城したため、奪回を目指す九鬼守隆との争いとなり、親子であるが敵対となった双方の軍勢が加茂・磯部あたりで戦ったが、九鬼守隆の大勝に終わる。この時、浜島豊後は九鬼嘉隆に従ったため、滅ぼされたとある。

それ以後浜島城主は、浜島源吾、九鬼豊後と出てくる。九鬼豊後は、佐々木半之允のことで、関が原合戦後慶長５年に鳥羽城主九鬼守隆によって領地を与えられ、寛永10年九鬼隆季に随い綾部に移るまで鳥羽にいて、浜島・南張などを知行地としていたことになる。

ところで志摩の国境であるが、大化の改新のときの尾鷲まで続く長大なものから、現在のような南張村以西、桧山路村以北の峰切りで区切られた国境へと変わったのは、豊臣秀吉の天正13年の論功行賞によって九鬼嘉隆に志摩鳥羽が与えられた頃のことであると考えられている。

近世

南張は、安土桃山時代頃はこのように浜島城下の領地であって、江戸時代には鳥羽藩の領地であった。

『浜島町史』には、地域に残る南張区古文書などをもとにした江戸時代の南張に関する記述は豊富である。以下、主なものをあげておく。

江戸時代に入ると、古文書に「名張村」と記されているのが出てくる。楠御前八柱神社に残る棟札の中にも名暦（1655）と天和（1681）の二枚の棟札は名張村とある。現在も小字名の一つに中尾名張とあるのはこの名残であろう。

南張が現在の「南張」という表記として出てくるのが、17世紀中葉以降である。寛文（1661～）年代頃よりは南張村とも称している。神社の正徳（1711～）年代以降の棟札は「南張村」と書かれている。

鳥羽藩への年貢献上の基礎資料となる享保11年（1726）の指出帳面には、浜島町内の五村（南張村・塩屋村・桧山路村・迫子村・浜島村）の石高合計1359石６斗のうち、南張が536石５斗であったので、周辺では主要な米作地であったことが分かる。このほか、鳥羽藩への献上品では農産品の他に、ふくだめ塩辛、海老、鰯、などの献上品の記録や、ヒジキ、あまのりの採集の記録、それに、さっぱ船（漁船）を十数隻保持した記録も残っている。海に面するこの地は当然に、農産品以外に海産物の収穫も行ってきて、昔から半農半漁の村であった。漁業に関しては、南張のおばべた山の前浜の好漁場をめぐって、260年にわたり浜島村と激しい漁業権争いを行ってきた。特に元和３年（1617）に始まったおばべた浜の紛争が、明暦３年（1657）に再燃した様子が、南張区の古文書の中に記載されている。（『明暦弐申年　浜島村ト

公事仕候時之覚書』）

江戸時代の南張村の人口が唯一わかるものとして、延享３年（1746）の鳥羽藩の「勢志郷村帳」があるが、それによると、家数99件、人口353人であった。

五人組は江戸時代の厳しい郷村管理の制度であるが、南張村もその制度の記録が一冊残っている。（南張村古文書、天保11年（1840））

宝暦６年（1756）には、村の戸数の約半数の47戸が焼失する大火があった。（南張村庄屋　門三郎が郡奉行に出した「乍ㄴ恐奉ㄴ願口上之覚書」）

安政元年（嘉永７年　1854）11月の安政地震では、南張村でも、津波により前浜堤防が大破し床上浸水九戸、床下浸水五戸、蔵の米六十八俵が濡米となる記録がある。（南張村庄屋　市兵衛、大地震、津波実記控帳）江戸時代にはその他にも何度かの地震があって、県内でも各所で被害の記録が残っている。それらについて浜島町内の記録は残ってないが、南張でもその度に何らかの被害があったことは推測されうる。

伊能忠敬の沿岸測量が志摩にも来たが、南張村にもきた。その際、村は人手を出して協力した。（南張村古文書「御測量御用　廻状」伊能忠敬記念館『測量日記第八巻』）

江戸幕府は鎖国に伴う異国船からの沿岸警備を各藩に求めたが、志摩の沿岸警備は鳥羽藩・藤堂藩が共同で行った。南張は、鳥越に砲台場を置いたが、大砲の設置はなくて見張場だったようである。（南張川口家文書　文化六年六月　津表御役人中様御廻村手控）

幕藩体制の緩みからくる諸藩の財政窮乏は鳥羽藩も例にもれなかったが、それは村の窮乏にもつながった。嘉永５年（1852）の大旱魃は、砂上台地にある南張村にも飲料水にも欠くほどの危機をもたらしたが、弘化２年（1845）から、南張村最大の工事として２ヵ年かけて作られた田曽村境にある湯夫池の水により難を逃れたとある。（南張村庄屋、市兵衛、「前代未聞実記」）

このようなことより、南張がすでに江戸時代中期には人口的にも現在の規模を持つ集落であって、支配層の影響を受けながらも独自の郷土の歴史を刻んできたことがわかる。

（３）南張周辺の遺跡

南張地区の埋蔵文化財についてであるが、南張集落地にある南張貝塚（１）では1969年に須恵器片等を表面採集している。2006年の三重県埋蔵文化財センターによる分布調査では集落地内畑脇の道路隅などに、中世の土師器片の散布が見られた。

南張海岸東端の海岸断崖から続く小高い丘は、「城山」と呼ばれている。江戸中期に描かれた南張村絵図にも、この城山が記録されていることから、それ以前からこの地名が所在していたことになる。この頂上付近には城山城跡（２）がある。付近には、現在は町水道の貯水槽もあるが、南面に向けて、逆三角形の平坦地中央に、高さ１ｍ、縦20ｍ、横15ｍの土塁がある。

16世紀に築かれたこの城は、浜島城の出城的役割を果たしていたと考えられる。五カ所の愛洲氏が宿田曽に花岡城を築いているから、それに対抗し、南張までの領有地を明確にする意味と、浜島城への狼煙場としての役割から作られたと推測されよう。そして、浜島城主が鳥羽に随身したことから廃城となり地名のみ残ったと考えられる。

幕末の沿岸警備のために置かれた鳥越砲台跡については、明確な所在地は不明である。

この他、浜島町は、浜島地区、大崎地区に古墳が多いことが特徴である。他の志摩地方の古墳群同様に、ほとんどが直径15ｍ内外の小型古墳である。それら古墳の中には、石室が残っているものもある。これら古墳からは、副葬品の勾玉、須恵器などが出土している。このうち、浜島古墳群（３）は、９基が昭和12年に三重県指定文化財として指定を受けたが、その後の調査により、全体で15基の円墳があることが確認された。この県指定文化財のひとつである第７号墳は、径約11間、高さ約９尺で、地元では通称「鬼のガロ」と称している。宮山古墳群（４）は、５基の古墳からなる。

浜島城址（５）は、浜島半島突端にある。戦国時代に、小野田筑後が築いた城とされており、明治17年に知事に提出した『浜島地誌』には、過去に灯籠や瓦が出土した記録もある。跡地には物見跡、砦跡、館跡、屯所跡と考えられる箇所があり古井戸もある。ここにあったのは、志摩に多くみられる砦ではなく

て城郭を構えた城であったようである。

その他、城跡としては、小字古城の現第一保育所の場所に浜島古城跡（６）がある。これは、白富安右衛門の館跡と考えられているが、古城の地名より、ここに城があったのは小野田筑後以前という可能性が高い。

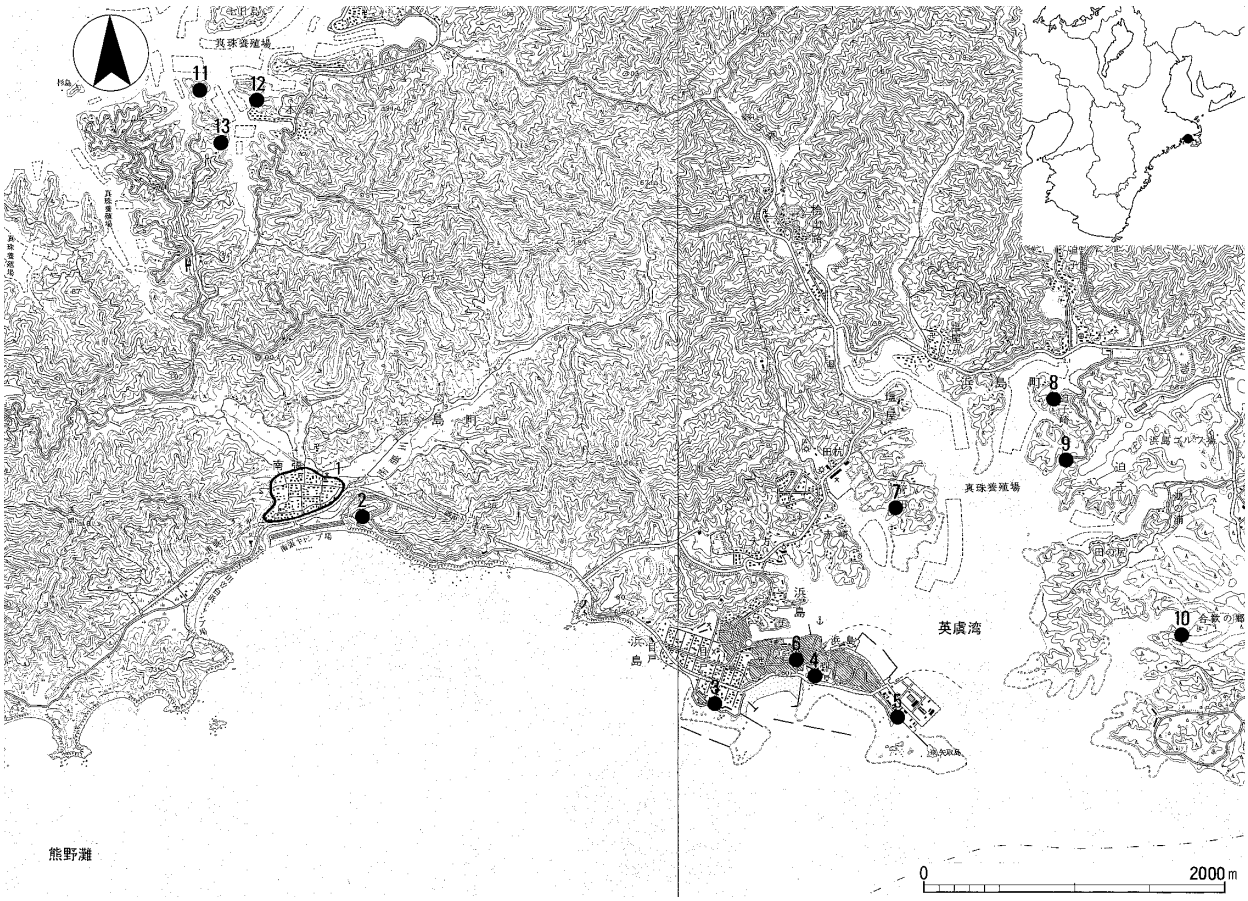
滝浜貝塚（７）は弥生～鎌倉時代の遺跡で、貝殻、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。上浦遺跡（８）では、縄文時代の黒曜石製石鏃、多数の黒曜石の削片が出土している。安目浦製塩遺跡（９）では、塩崎式製塩土器が出土している。この遺跡は迫子にあるが、迫子・塩屋は中世の製塩地であった。２基の古墳が確認されている西宝地古墳群(10)は、大崎半島にある古墳群の１つである。

また、南張に隣接する南伊勢町の木谷には、土師器、高杯が出土しているトコナギ遺跡(11)、縄文時代の磨製石斧が出土している木谷遺跡(12)、縄文時代の石斧が出土しているビヤラク谷遺跡(13)がある。

（木本）

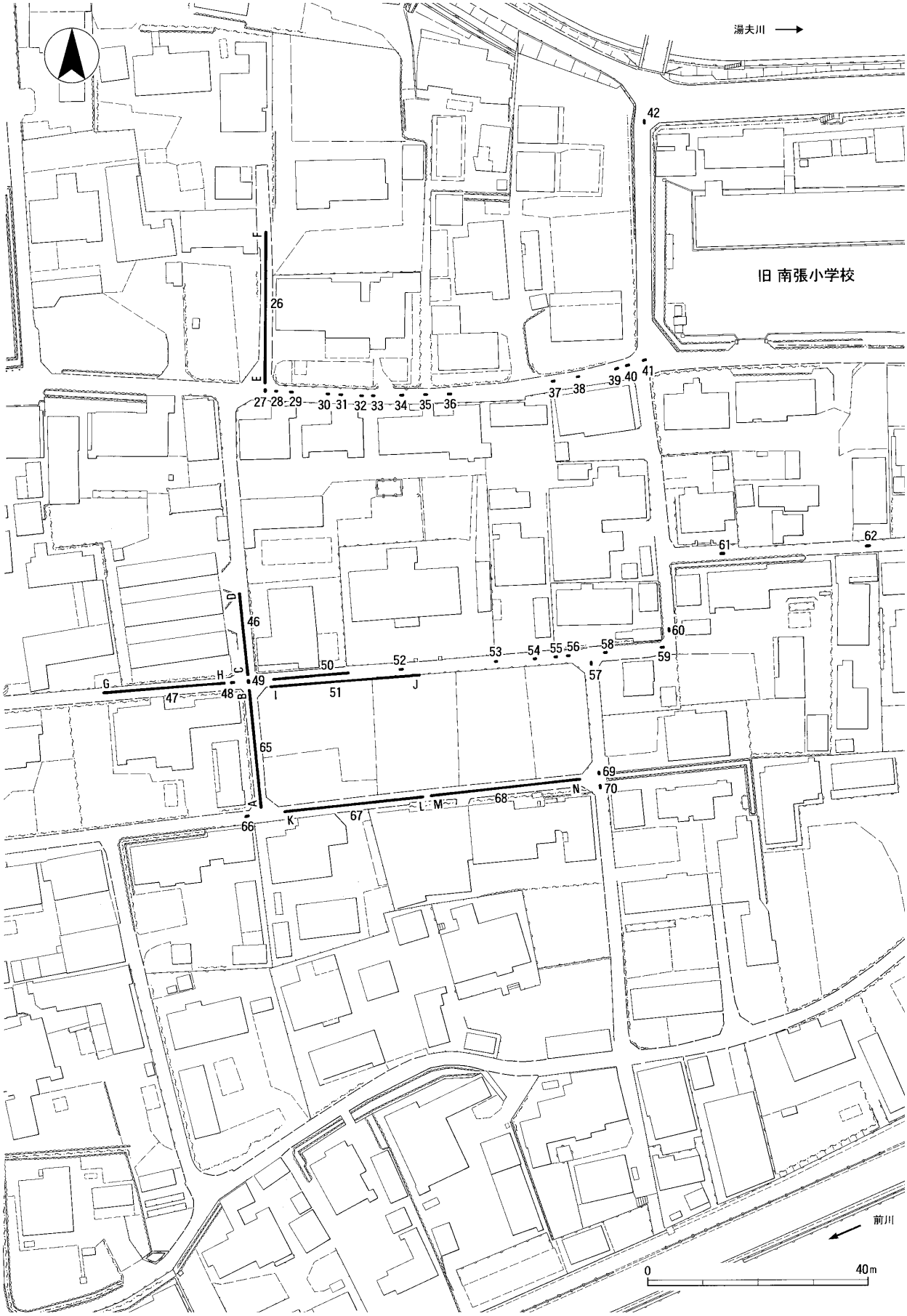
【参考文献】

- 浜島町史編纂委員会『浜島町史』1989年
- 鈴木敏雄、西岡市丸『志摩古文化財図録』1960年
- 鳥羽市史編纂室『鳥羽市史』1991年
- 南勢町誌編纂委員会『南勢町誌』1985年
- 平凡社『三重県の地名』1983年
- 平凡社『図説伊勢志摩郷土の歴史〈上巻〉』1992年
- 郷土出版社『定本　三重県の城』1991年
- 三重県教育委員会『三重の中世城館』1977年



第１図　　遺跡位置図　（1：50,000）　［ 国土地理院「相賀浦」「浜島」1：25,000より作成 ］

第２図　　調査坑配置図　（1：2,000）



第３図　　調査坑配置図（拡大図）　（1：1,000）（アルファベットは第５図　土層断面図　に対応）

調査坑番号	調査次数	調査時の番号	遺構	遺物	備考	調査坑番号	調査次数	調査時の番号	遺構	遺物	備考
1	範確	1	なし	なし		36	2次	14	なし	なし	
2	範確	2	なし	なし		37	2次	11	なし	なし	
3	3次	4	なし	なし		38	2次	12	なし	貝殻	
4	3次	5	なし	なし		39	2次	9	なし	なし	
5	範確	3	なし	なし		40	2次	6	なし	なし	
6	範確	4	なし	なし		41	1次	2	なし	なし	
7	範確	5	なし	なし		42	1次	1	なし	近世陶器椀	
8	範確	6	なし	なし		43	3次	6	なし	なし	
9	範確	7	なし	なし		44	3次	8	なし	なし	
10	範確	8	なし	なし		45	3次	9	なし	近世磁器椀	
11	範確	9	なし	なし		46	2次	28,30,32,33	溝？	山茶椀、近世陶器椀・皿、磁器	
12	3次	3	なし	なし		47	2次	40	なし	中世土師器小皿、近世擂鉢、焙烙	
13	3次	1	なし	なし		48	2次	37	なし	なし	
14	3次	2	なし	なし		49	2次	26	ピット	中・近世土師器片	
15	3次	7	なし	軽石		50	2次	16,18,20,23,24	ＳＤ１・２	山茶椀、近世陶器甕、瓦質土器	
16	3次	23	なし	なし		51	2次	45	溝？	山茶椀、近世磁器椀、陶器椀	
17	3次	10	なし	なし		52	2次	15	なし	近世陶器甕	
18	3次	18	なし	近世？瓦		53	2次	13	なし	なし	
19	3次	19	なし	近世陶器片		54	2次	10	なし	なし	
20	3次	22	なし	なし		55	2次	8	なし	なし	
21	3次	15	なし	骨、貝殻		56	2次	7	なし	なし	
22	3次	17	なし	中世土師器片、貝殻		57	2次	44	なし	なし	
23	3次	13	なし	貝殻		58	2次	5	なし	貝殻	
24	3次	20	なし	なし		59	2次	4	なし	なし	
25	3次	21	なし	なし		60	2次	3	なし	なし	
26	2次	35,36,38,39	ＳＫ３・４	中世土師器皿・鍋、近世陶器鉢・椀		61	3次	11	なし	なし	
27	2次	34	なし	山茶椀、近世陶器椀		62	3次	12	なし	近世陶器片、貝殻	
28	2次	31	なし	中世土師器皿・鍋、近世陶器椀、擂鉢、甕		63	3次	14	なし	なし	
29	2次	29	なし	中世土師器鍋、近世陶器皿・鉢・甕、磁器椀		64	3次	16	なし	なし	
30	2次	27	なし	山茶椀、近世陶器甕		65	2次	41,42,43	ＳＫ５ピット	近世土師器小皿	小皿が多量に出土
31	2次	25	なし	なし		66	2次	47	なし	なし	
32	2次	22	なし	中世土師器鍋、山茶椀、近世陶器椀		67	2次	48	なし	なし	
33	2次	21	なし	山茶椀、中・近世土師器片		68	2次	50	なし	近世陶器片	
34	2次	19	なし	中世陶器片、近世陶器椀・皿		69	2次	46	なし	なし	
35	2次	17	なし	近世陶器甕		70	2次	49	なし	なし	

第１表　　調査坑一覧表

第３章　遺　構

１　基本層序

今回の調査では、南張貝塚のほぼ全域に渡っての埋土の堆積状況を確認できた。道路下の基本層序は大まかに、第Ⅰ層：灰色系の砂質土、第Ⅱ層：黒褐色～暗褐色系の砂質土、第Ⅲ層：褐色系の砂、第Ⅳ層：にぶい黄褐色～にぶい黄橙色系の粗い砂、第Ⅴ層：灰白色系の砂（硬く締まって岩盤状になっている）である。第Ⅱ層には中世～近世の遺物が含まれていた。第Ⅲ層がないところもあり、第Ⅲもしくは第Ⅳ層の上面を遺構の検出面とした。

２　遺構の概要

今回の調査は、コンクリート舗装された道路の下で、排水管設置工事に必要な幅（0.8～1.2m程度）の調査であった。また、道路の下には、既存の排水管や水道管等の埋設時の攪乱も多く見られた。

上記の制約があり、遺構の確認は困難であったが集落中央部の畑周辺と、旧南張小学校と楠御前八柱神社の間の道路で遺構を確認した。以下、遺構の状況について概述するが、数値等は遺構一覧表を参照されたい。

ＳＤ１　調査坑50で確認した。調査区の半分以上が旧排水管の埋設に伴って攪乱されていたため、確認できた長さはわずか50㎝であった。断面で砂と砂質土の互層が確認でき、水が流れていたと考えられるため溝とした。

ＳＤ２　ＳＤ１の西1.5mで確認した。東肩は確認できたが、西肩は確認できなかった。東肩に沿って、こぶし大の川原石を確認した。溝底から陶器山茶椀（１）が出土した。山茶椀編年[①]の第６型式（13世紀前半）併行のものである。南に隣接する調査坑51では、平面では確認できなかったが、断面でこの続きと考えられる溝を確認した。

ＳＫ３　調査坑26で確認した。調査区外に伸びるため、半円形が確認できたのみである。南伊勢系土師器編年[②]の第３ａ段階（14世紀後半）に併行する土師器鍋（４・５）と、土師器皿（３）が出土した。

ＳＫ４　調査坑26、ＳＫ３の５ｍほど北で確認した。調査区外に伸びるため、半円形が確認できたのみである。土師器皿（２）が出土した。

ＳＫ５　調査坑65の中央付近で確認した。調査区外に伸びるため全形は確認できないが、径0.6mほどの円形の土坑と考えられる。土師器小皿がまとまって出土した。　（西村）

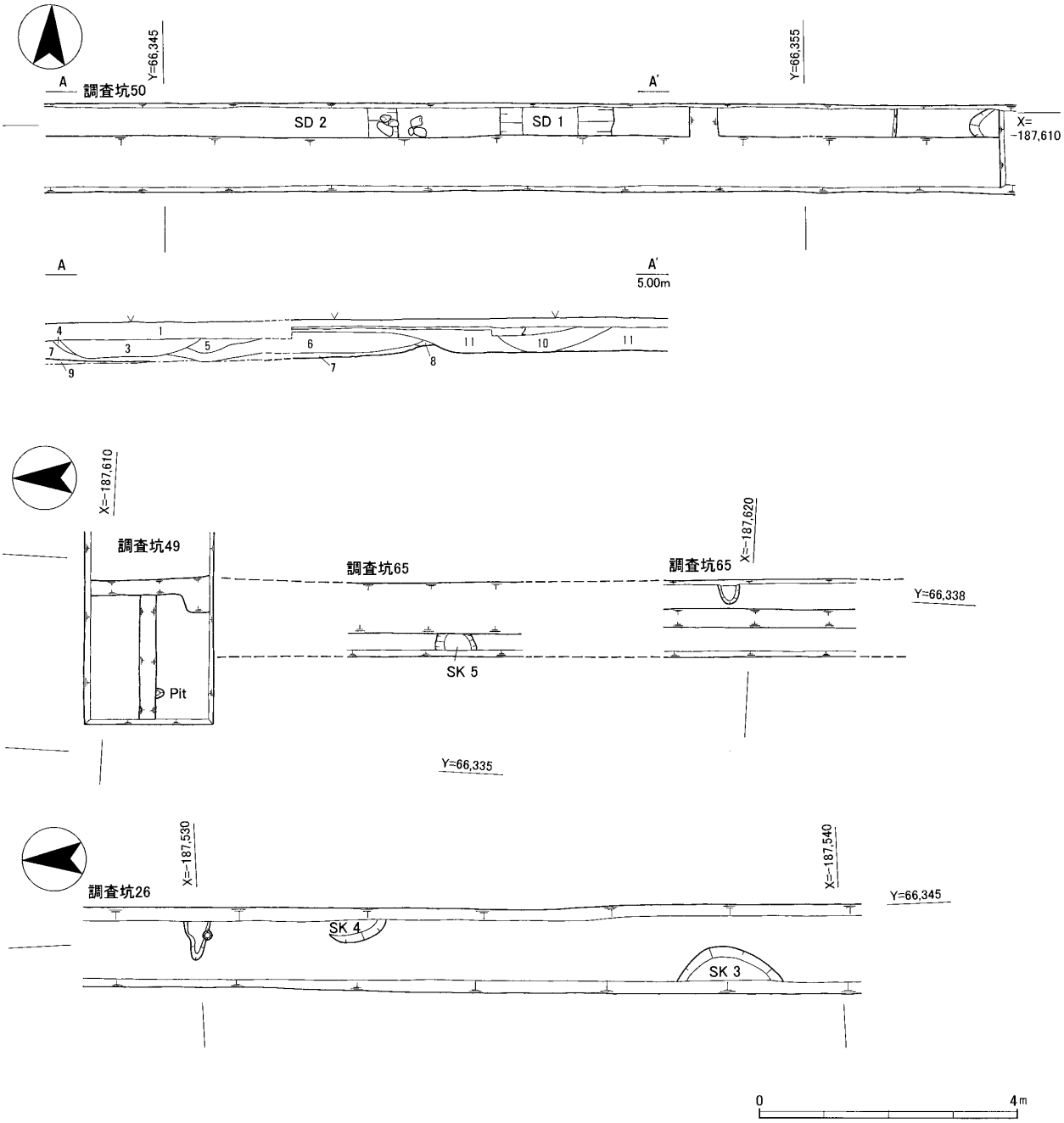
【註】

① 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要第３号』三重県埋蔵文化財センター　1994年

② 伊藤裕偉「中南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会　1990年及び、伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土師器工人」『研究紀要　第１号』三重県埋蔵文化財センター　1992年

遺構番号		調査坑	種別	時期	長さ(m)	幅(m)	深さ(㎝)	出土遺物	備考
SD	1	50	溝	鎌倉以降	不明	5.0以上	40		
SD	2	50	溝	鎌倉	不明	1.8	40	陶器山茶椀（１）	
SK	3	26	土坑	室町	1.6		50	土師器皿（３）、鍋（４・５）	
SK	4	26	土坑	中世	0.8		5	土師器皿（２）	当初はpitとしていた
SK	5	65	土坑	江戸	0.6		20	土師器小皿（６～15）	当初はpitとしていた

第２表　　遺構一覧表



1　置土、コンクリート

2　置土か？　黒色土 7.5Y3/1

3　SD2埋土　黒褐色砂質土7.5YR3/2とにぶい黄橙色砂10YR7/3の互層

4　SD2埋土　黒褐色砂10YR3/2

5　SD2埋土　黒褐色砂質土7.5YR3/2とにぶい黄橙色砂10YR7/3の互層

6　SD2埋土　黒褐色砂7.5YR3/2

7　SD2埋土　褐色砂10YR4/4

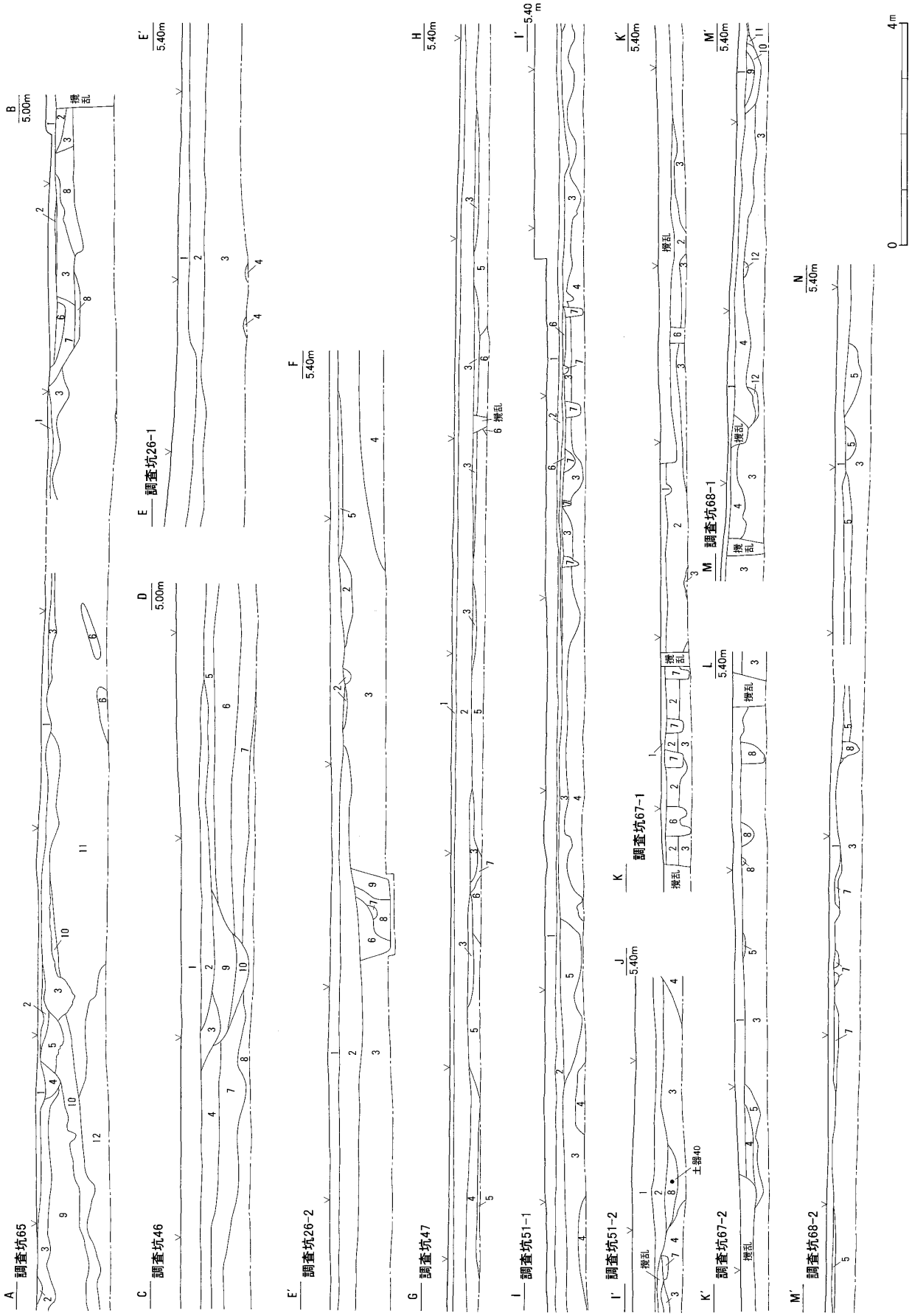
8　SD2埋土　黒褐色砂質土7.5YR3/2に　にぶい黄橙色砂10YR7/3が斑状に混じる

9　検出面　にぶい黄橙色砂　10YR6/3

10　SD1埋土　黒褐色砂質土7.5YR3/2

11　黒褐色砂質土7.5YR3/2とにぶい黄橙色砂10YR7/3の互層

第４図　　遺構平面図・断面図　（1：100）



第５図　　土層断面図　（1：100）

調査坑番号	番号	土層名	
65	1	置土	－
	2	締まりのない褐灰色砂質土	7.5YR4/1
	3	にぶい黄褐色砂	10YR4/3
	4	にぶい黄褐色砂に径0.5cmの円礫が混入	10YR4/3
	5	灰黄褐色砂	10YR4/3
	6	ＳＫ５埋土　褐灰色砂質土	10YR4/1
	7	ＳＫ５埋土　締まりのない褐灰色砂質土	7.5YR4/1
	8	にぶい黄褐色砂（３層と５層の中間）	10YR6/3
	9	にぶい黄橙色砂に鉄分が沈着	10YR7/4
	10	にぶい黄橙色砂	10YR7/2
	11	にぶい黄橙色砂	10YR7/3
	12	灰白色の砂が固まって岩状になったもの	10YR8/1
46	1	置土	－
	2	にぶい黄褐色砂	10YR5/3
	3	にぶい黄褐色砂に礫が混入	10YR4/3
	4	締まりのない黒褐色砂質土	7.5YR3/2
	5	締まりのある黒褐色砂質土	5YR3/1
	6	締まりのない黒褐色砂質土	7.5YR3/2
	7	にぶい黄褐色砂	10YR4/3
	8	にぶい黄橙色砂	10YR7/2
	9	にぶい黄褐色砂に貝殻、陶器片が多く混入	10YR4/3
	10	にぶい黄橙色砂	10YR7/2
26	1	置土	－
	2	締まりのある黒褐色砂質土	7.5YR3/2
	3	にぶい黄褐色砂質土	10YR4/3
	4	にぶい黄橙色砂	10YR7/3
	5	にぶい黄褐色砂	10YR4/3
	6	ＳＫ３埋土　締まりのある黒褐色砂質土	10YR3/1
	7	ＳＫ３埋土　第６層に第８層がブロック状に混じる	－
	8	ＳＫ３埋土　明黄褐色粘質土	2.5Y7/6
	9	ＳＫ３埋土　しまりある黒褐色砂質土	10YR3/1

調査坑番号	番号	土層名	
47	1	コンクリート	－
	2	置土	－
	3	締まりの少ない黒褐色砂	10YR3/2
	4	締まりのない　にぶい黄橙色砂に貝殻、近・現代の土器を含む	10YR7/3
	5	にぶい黄褐色砂	10YR4/3
	6	にぶい黄橙色砂	10YR7/2
	7	第３層に第６層がまざる	－
51	1	コンクリート	－
	2	置土	－
	3	灰褐色砂	7.5YR4/2
	4	にぶい黄橙色砂	10YR7/2
	5	ＳＤ２埋土　黒褐色砂質土と第４層に似た砂が互層となる	7.5YR3/1
	6	黒褐色砂	7.5YR3/2
	7	第３層に第４層がまざる	－
	8	締まりのある灰褐色砂	7.5YR4/2
67・68	1	表土 褐灰色砂質土	10YR4/1
	2	にぶい黄褐色砂	10YR4/3
	3	にぶい黄橙色砂	10YR7/3
	4	暗褐色砂	7.5YR3/3
	5	にぶい黄褐色砂	10YR4/3
	6	第２層に第３層がブロック状に混じる	－
	7	第１層～第３層が混じる	－
	8	第５層に第３層がブロック状に混じる	－
	9	第４層に第３層がブロック状に混じる	－
	10	第４層と第３層が互層となる	－
	11	第４層に第３層がブロック状に混じる（第４層が多く混じる）	－
	12	第４層に第３層がブロック状に混じる	－

第３表　　土層名称

第４章　遺　物

遺物は8.67kg（うち骨が0.65kg）が出土した。遺物の時期[①]は、鎌倉時代から江戸時代にかけてのものが多数を占める。

１　ＳＤ２出土遺物（１）

１は、渥美産と考えられる山茶椀。山茶椀編年の第６型式（13世紀前半）併行のものである。

２　ＳＫ３出土遺物（３～５）

３は、南伊勢系の土師器皿。４・５は南伊勢系の土師器鍋。南伊勢系土師器編年の第３ａ段階（14世紀後半）併行のものである。

３　ＳＫ４出土遺物（２）

２は、南伊勢系の土師器皿。器壁が比較的厚く、13～14世紀ごろのものと考えられる。

４　ＳＫ５出土遺物（６～15）

６～15は、南伊勢系の系統をひくと考えられる土師器皿。口径が６㎝前後と小さく、江戸時代以降のものと考えられる。15は、ＳＫ５周辺の表土で確認したが、他の土師器皿との類似から、ＳＫ５から出土したものと考えた。

５　黒褐色土出土遺物（16～31）

第３章で、基本層序の第Ⅱ層としたものである。中世～近世の遺物が出土した。

16は、南伊勢系の土師器皿。17～19は南伊勢系の土師器鍋で、第４ｃ段階（16世紀前後）併行のものである。19は口縁端部の形が他のものと異なるが、器壁の厚さや調整の類似から南伊勢系の範疇でとらえられよう。20～22は陶器山茶椀。第６～７型式（13世紀代）併行のものである。20は底部加工円盤として使用されている。23～31はいずれも江戸時代の陶器及び磁器である。23は陶器椀。高台部に重ね焼きの痕跡と思われる付着物がある。24・27は陶器天目茶椀、25は陶器小椀、28・29は陶器椀。29の外面には鉄釉による文様が描かれている。30は陶器擂鉢。31は常滑産の陶器甕である。

６　表土、攪乱等出土遺物（32～68）

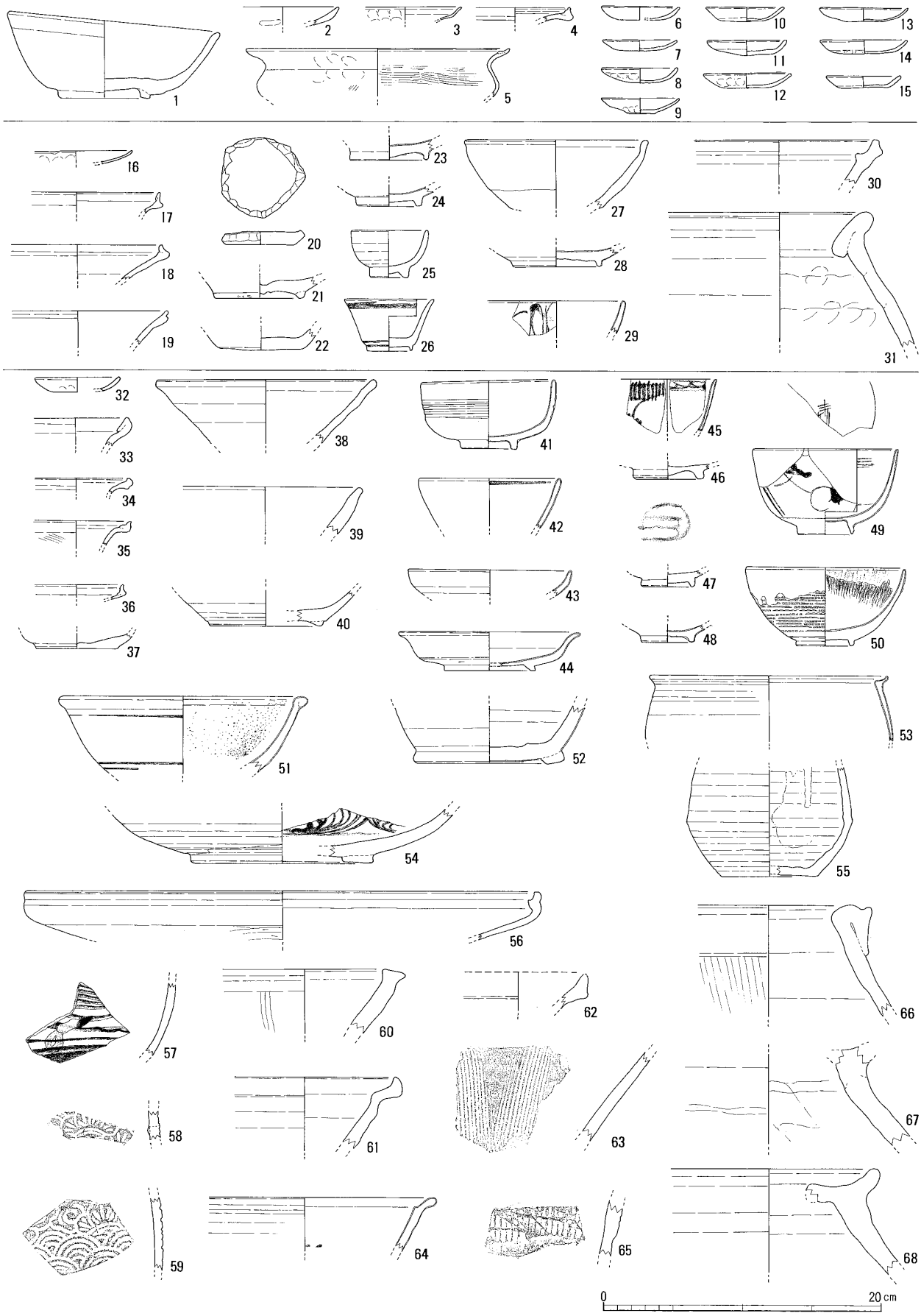
32は、南伊勢系の土師器小皿。33～36は南伊勢系の土師器鍋。33は第１ａ段階（13世紀前後）、35・36は第４段階（16世紀ごろ）併行のものである。37～40は陶器山茶椀。第６～７型式（13世紀代）併行の渥美産ものである。41～68は江戸時代（一部明治以降のものも含まれる）の陶器・磁器等である。

41は瀬戸産の腰錆椀。42は陶器椀。43・44は陶器皿。45は磁器椀。46は陶器椀。底部外面に墨で記号が書かれている。47は陶器の椀。48は陶器小椀。49は磁器椀。50は陶器椀。瀬戸産で19世紀ごろのものか。51は鉢と考えられる。内面に吹き付け模様が施され、明治以降のものの可能性がある。52は壺などの底部であろう。53は行平鍋。54は陶器皿で、「馬の目皿」と呼ばれている。55は半胴もしくは壺で、明治以降のものの可能性がある。56は土師質の焙烙。57は陶器の破片。器種や時期は不明である。58・59は瓦質のもので、鉢であろうか。外面に、沈線による雲・松・青海波文が施されている。58には円形の穴が開けられている。60～63は陶器擂鉢。64は陶器鉢。内面にわずかに鉄釉による施文が見られる。65～68は常滑産の陶器甕。66は常滑窯編年の第10型式（15世紀後半）、67・68は18世紀代のものである。　（西村）

【註】

① 遺物の年代等に関しては、以下の文献を参考にした。

- 南伊勢系土師器鍋：伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history　vol.1』三重歴史文化研究会　1990年及び、伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土師器工人」『研究紀要　第１号』三重県埋蔵文化財センター　1992年
- 南伊勢系土師器皿：美杉村教育委員会「総括～これまでの北畠氏館跡発掘調査～」『北畠氏館跡９』2005年
- 古瀬戸陶器：藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』瀬戸市歴史民俗資料館　1991年
- 常滑産陶器：中野晴久「常滑・渥美」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社　1995年及び、中野晴久「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要Ⅱ』常滑市教育委員会　1986年



第６図　　出土遺物実測図　（1：4）

番号	実測番号	様・質	器種など	新調査坑番号	旧調査坑番号	遺構・層名等	大きさ(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調		残存度	特記事項
1	001-07	陶器	山茶椀	50	2-20	ＳＤ２	(口)15.2 (高)6.2	外;ロクロナデ→高台貼り付け 内;ロクロナデ	密	灰白	5Y7/1	高台部7/12	全体の形がいびつ
2	001-04	土師器	皿	26	2-38	ＳＫ４		外;ヨコナデ 内;ヨコナデ→オサエ	密	にぶい黄橙 灰白	10YR7/3 10YR8/1	小片	旧遺構名はpit
3	001-03	土師器	皿	26	2-38	ＳＫ３		外;ナデ、ヨコナデ 内;ヨコナデ→オサエ	密	にぶい黄橙	10YR7/3	小片	
4	001-02	土師器	鍋	26	2-38	ＳＫ３		外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	密	にぶい黄橙 にぶい黄橙	10YR7/2 10YR7/3	小片	
5	001-01	土師器	鍋	26	2-38	ＳＫ３	(口)19.0	外;オサエ、ナデ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部2/12	
6	008-08	土師器	小皿	65	2-41	ＳＫ５	(口)5.6 (高)1.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁部4/12	旧遺構名はpit
7	008-09	土師器	小皿	65	2-41	ＳＫ５	(口)5.2 (高)0.8	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ、オサエ→ヨコナデ	密	橙	5YR6/6	口縁部6/12	旧遺構名はpit
8	008-03	土師器	小皿	65	2-41	ＳＫ５	(口)5.5 (高)1.1	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ、オサエ→ヨコナデ	密	にぶい橙 浅黄橙	7.5YR7/4 7.5YR8/4	口縁部9/12	旧遺構名はpit
9	008-04	土師器	小皿	65	2-41	ＳＫ５	(口)5.6 (高)1.1	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ、オサエ→ヨコナデ	密	橙	5YR6/6	口縁部9/12	旧遺構名はpit
10	008-02	土師器	小皿	65	2-41	ＳＫ５	(口)5.6 (高)0.9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ、オサエ→ヨコナデ	密	橙 にぶい橙	2.5YR7/6 7.7YR7/4	完形	旧遺構名はpit
11	008-01	土師器	小皿	65	2-41	ＳＫ５	(口)5.7 (高)1.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ、オサエ→ヨコナデ	密	橙	5YR6/8	完形	旧遺構名はpit
12	008-07	土師器	小皿	65	2-41	ＳＫ５	(口)6.3 (高)1.1	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ、オサエ→ヨコナデ	密	橙	5YR6/6	口縁部4/12	旧遺構名はpit
13	008-06	土師器	小皿	65	2-41	ＳＫ５	(口)6.3 (高)1.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ、オサエ→ヨコナデ	密	橙	5YR6/6	口縁部4/12	旧遺構名はpit
14	008-05	土師器	小皿	65	2-41	ＳＫ５	(口)6.2 (高)1.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ、オサエ→ヨコナデ	密	橙	2.5YR6/6	口縁部4/12	旧遺構名はpit
15	009-01	土師器	小皿	65	2-41	ＳＫ５	(口)5.4 (高)0.9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙	5YR6/6	口縁部4/12	旧遺構・層位名は表土
16	007-04	土師器	皿	26	2-36	黒褐色土		外;ナデ 内;ナデ	密	浅黄橙	10YR8/3	小片	
17	004-03	土師器	鍋	28	2-31	黒褐色土		外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	密	褐灰 にぶい橙	5YR4/1 7.5YR7/3	小片	
18	007-07	土師器	鍋	26	2-36	黒褐色土		外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙	7.5YR6/4	小片	
19	007-08	土師器	鍋	26	2-36	黒褐色土		外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	10YR6/4	小片	
20	001-06	陶器	山茶椀	32	2-22	黒褐色土		外;糸切痕 内;ロクロナデ	やや粗	灰白	2.5YR7/1	底部完存	加工円盤に転用か？
21	002-03	陶器	山茶椀	30	2-27	黒褐色土	(高台)6.6	外;ロクロナデ、高台貼り付け、高台に籾殻痕 内;ロクロナデ	粗	灰白	5Y7/1	高台部6/12	旧遺構・層位名は包含層
22	005-04	陶器	山茶椀	27	2-34	黒褐色土	(底)6.0	外;ロクロナデ→糸切痕 内;ロクロナデ	密	灰黄	2.5Y6/2	底部3/12	
23	003-06	陶器	椀	28	2-31	黒褐色土	(高台)5.6	外;ロクロナデ→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;灰白 釉;灰オリーブ	5Y5/3 7.5Y8/1	高台部6/12	高台に付着物あり (重ね焼きの痕跡か)
24	005-05	陶器	天目茶椀	26	2-36	黒褐色土	(高台)4.7	外;ロクロケズリ、削り出し高台→施釉(鉄釉) 内;ロクロナデ→施釉(鉄釉)	密	素地;灰白 釉;暗褐	2.5Y8/2 7.5YR3/3	高台部4/12	
25	005-06	陶器	小椀	26	2-36	黒褐色土	(口)5.5 (高台)3.4 (高)2.8	外;ロクロナデ→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;灰黄 釉;灰白	2.5Y7/2 7.5Y7/2	高台部完存	
26	005-07	磁器	小杯	26	2-35	黒褐色土	(口)6.5 (高台)3.7 (高)3.3	外;ロクロナデ→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;灰白 釉;明青灰	N8/ 5B7/1	高台部完存	
27	005-08	陶器	天目茶椀	26	2-36	黒褐色土	(口)13.1	外;ロクロナデ→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;浅黄 釉;黒褐	2.5Y7/3 10YR3/1	口縁部1/12	
28	005-03	陶器	椀	27	2-34	黒褐色土	(高台)6.5	外;ロクロナデ→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;灰黄 釉;灰オリーブ	2.5Y7/2 5Y5/2	高台部5/12	
29	007-09	陶器	椀	26	2-36	黒褐色土		外;ロクロナデ→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;灰黄 釉;灰白	2.5Y6/2 7.5Y7/1	小片	
30	006-05	陶器	擂鉢	26	2-36	黒褐色土		外;ヨコナデ→施釉(錆釉) 内;ヨコナデ→施釉(錆釉)	密	素地;灰黄 釉;赤黒	2.5Y6/2 2.5YR2/1	小片	
31	010-01	陶器	甕	22	3-17	黒褐色土		外;ヨコナデ、ナデ 内;オサエ、ナデ	密	赤褐 赤灰	10R5/4 2.5YR4/1	小片	
32	007-03	土師器	小皿	47	2-40	攪乱	(口)6.2 (高)1.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙	5YR6/6	口縁部2/12	
33	007-05	土師器	鍋	26	2-38	攪乱		外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	10YR7/2	小片	
34	009-06	土師器	鍋	－	分布調査	表採		外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	密	にぶい橙	7.5YR7/4	小片	

第４表　　出土遺物観察表（１）　（ 旧調査坑番号の「－」の前の数字は次数を示す ）

番号	実測番号	様・質	器種など	新調査坑番号	旧調査坑番号	遺構・層名等	大きさ(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調		残存度	特記事項
35	002-06	土師器	鍋	29	2-29	攪乱		外;ハケメ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰黄褐 にぶい黄褐	10YR4/2 10YR7/3	小片	
36	009-04	土師器	鍋	―	分布調査	表採		外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	密	にぶい橙	7.5YR7/4	小片	
37	009-05	陶器	山茶椀	―	分布調査	表採	(高台)6.0	外;ロクロナデ→糸切り痕 内;ロクロナデ	密	灰白	N7/	高台部2/12	高台が剥がれた可能性もある
38	003-04	陶器	山茶椀	46	2-30	表土	(口)15.8	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密	灰黄	2.5YR7/2	口縁部1/12	
39	007-06	陶器	山茶椀	46	2-32	攪乱		外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密	黄灰	2.5Y6/1	小片	
40	005-02	陶器	山茶椀	51	2-45	灰褐色土	(高台)8.3	外;ロクロナデ→高台貼り付け 内;ロクロナデ	密	灰黄	2.5Y6/2	高台部4/12	旧遺構・層位名は断面
41	010-05	陶器	椀	19	3-19	攪乱	(口)9.7 (高台)4.0 (高)4.8	外;ロクロケズリ、削り出し高台→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;灰白 釉;灰白 暗褐	2.5Y8/1 7.5Y8/1 7.5YR7/2	高台部8/12	
42	007-01	陶器	椀	46	2-32	攪乱	(口)10.3	外;ロクロナデ→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;灰黄 釉;灰白	2.5Y7/2 10Y8/1	口縁部1/12	
43	007-02	陶器	皿	46	2-32	攪乱	(口)11.9	外;ロクロナデ→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;灰黄 釉;灰白	2.5Y6/2 7.5Y7/2	口縁部2/12	
44	003-01	陶器	皿	29	2-29	攪乱	(口)13.0 (高台)6.4 (高)2.8	外;ロクロナデ→施釉(鉄釉) 内;ロクロナデ→施釉(鉄釉)	密	素地;淡黄 釉;暗赤褐	2.5Y8/3 10YR3/3	口縁部2/12	
45	009-03	磁器	湯飲椀	51	2-45	攪乱		外;ロクロナデ→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;灰白 釉;灰白	5Y7/1 N8/	小片	
46	001-05	陶器	椀	42	1-1	攪乱	(高台)5.1	外;削り出し高台 内;ケズリ→施釉	密	素地;浅黄 釉;灰白	7.5Y7/3 2.5Y7/1	底部完存	外面底部に墨書あり
47	009-07	陶器	椀	―	―	排土	(高台)3.8	外;ロクロナデ→削り出し高台→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;灰白 釉;灰白	5Y8/2 2.5Y8/2	高台部8/12	
48	009-02	陶器	小椀	51	2-45	攪乱	(高台)3.8	外;ロクロナデ→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;灰白 釉;灰白	2.5GY8/1 2.5Y8/2	高台部6/12	
49	002-05	磁器	椀	29	2-29	攪乱	(口)10.4 (高台)4.0 (高)6.1	外;ロクロナデ→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;灰白 釉;灰白	N8/ 5GY8/1	高台部4/12	
50	011-02	陶器	椀	20	3-22	攪乱	(口)11.5 (高台)4.1 (高)5.6	外;ロクロケズリ、削り出し高台→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;灰白 釉;黄褐 極暗赤褐	5Y7/1 2.5Y5/4 2.5YR2/2	高台部完存	
51	003-03	陶器	鉢?	29	2-29	攪乱	(口)18.0	外;ロクロナデ→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;灰白 釉;灰白	10Y8/1 5Y8/1	口縁部3/12	
52	005-01	陶器	壺?	46	2-32	攪乱	(高台)10.8	外;ロクロナデ→高台貼り付け→施釉(灰釉) 内;ロクロナデ→施釉(錆釉)	密	素地;灰白 灰釉;灰白 錆釉;褐	2.5Y7/1 7.5Y7/2 7.5YR4/4	高台部6/12	
53	006-01	陶器	行平鍋	46	2-32	攪乱	(口)17.1	外;ロクロナデ→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;灰白 釉;灰白	2.5Y8/2 7.5Y7/2	口縁部1/12	
54	011-01	陶器	皿	19	3-19	攪乱	(高台)13.0	外;ケズリ→施釉 内;ナデ→施釉	密	素地;灰白 釉;灰白	7.5Y8/1 5Y8/1	高台部4/12	
55	010-04	陶器	半胴 or 壺	19	3-19	攪乱	(底)7.0	外;ロクロナデ→施釉 内;ロクロナデ	密	素地;灰白 釉;赤褐	5Y7/1 2.5Y4/6	底部5/12	
56	006-02	土師質	焙烙	47	2-40	攪乱	(口)37.0	外;ケズリ→ヨコナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	密	にぶい赤褐	5YR5/4	口縁部1/12	
57	010-06	陶器	不明	21	3-15	灰黄褐色土		外;ナデ→施釉 内;ナデ→施釉	密	褐灰	5YR5/1	小片	
58	002-02	瓦質土器	鉢?	50	2-20	攪乱		外;文様(松) 内;ヨコナデ	密	灰	N5/	小片	59と同一個体。穴あり
59	002-01	瓦質土器	鉢?	50	2-20	攪乱		外;文様(松・雲?・青海波) 内;ヨコナデ	密	黄灰	2.5Y5/1	小片	58と同一個体。
60	006-04	陶器	擂鉢	47	2-40	攪乱		外;ナデ→ヨコナデ→施釉(錆釉) 内;ナデ→ヨコナデ→櫛目	密	素地;灰黄 釉;灰褐	2.5Y6/2 5YR4/2	小片	
61	002-04	陶器	練鉢	29	2-29	攪乱		外;ロクロナデ→施釉(錆釉) 内;ロクロナデ	密	素地;浅黄 釉;褐灰	2.5Y8/3 5YR4/1	小片	
62	003-05	陶器	練鉢	28	2-31	表土		外;ロクロナデ→施釉(錆釉) 内;ロクロナデ→施釉(錆釉)	密	素地;浅黄灰 釉;暗灰赤	10YR7/4 7.5YR4/1	小片	
63	004-01	陶器	擂鉢	28	2-31	表土		外;ロクロナデ→施釉(錆釉) 内;ロクロナデ→櫛目(12本/3cm)	密	素地;にぶい黄橙 釉;褐灰	7.5YR4/1 10YR7/3	小片	
64	006-03	陶器	鉢	26	2-38	攪乱		外;ロクロナデ→施釉 内;ロクロナデ→施釉	密	素地;灰白 釉;灰白	2.5Y8/2 7.5Y7/2	小片	
65	004-02	陶器	甕	28	2-31	排土		外;タタキ痕 内;ナデ	密	黄灰 灰黄	2.5Y5/1 2.5Y6/2	小片	
66	003-02	陶器	甕	29	2-29	攪乱		外;ロクロナデ、工具ナデ→施釉(錆釉) 内;ロクロナデ、オサエ→施釉(錆釉)	やや粗	素地;灰オリーブ 釉;灰赤	7.5Y5/1 2.5YR5/2	小片	
67	010-03	陶器	甕	21	3-15	―		外;ヨコナデ、ナデ 内;オサエ、ナデ	密	にぶい橙 浅黄橙	5YR6/4 7.5YR8/4	小片	
68	010-02	陶器	甕	18	3-18	攪乱		外;ヨコナデ、ナデ 内;オサエ、ナデ	密	灰褐 にぶい赤褐	5YR4/1 2.5YR5/3	小片	

第５表　　出土遺物観察表（２）　（ 旧調査坑番号の「ー」の前の数字は次数を示す ）

第５章　自然科学分析

１　自然科学分析の目的

南張貝塚からは、人骨の可能性のある骨が出土している。この骨は、重機掘削時に出土したもので、遺構や時期等は判断できない。しかし、志摩市では西殿遺跡[1]など海岸部の砂浜において相当数の人骨が出土し、墓地があったことが想定されている。今回、種別、雌雄（性別）、年齢、個体数などの同定（業務委託）を行い今後の参考資料とした。　（西村）

２　第３次調査出土骨の同定

（１）試料

試料は、現在の集落西寄りの箇所から、重機掘削時に出土した骨22点（骨１～22）である。骨が出土した堆積物は、集落中央部分の調査区における標準層序のうち、近世～近代の堆積層（Ⅱ層）の下位層準にある黄褐色砂からなるⅣ層に類似するとされている。

（２）分析方法

試料を肉眼で観察し、種類および部位を同定する。また接合関係についても確認する。

（３）結果

結果を第７図、第６表に示す。いずれも非焼骨である。以下各試料の結果について示す。

＜骨１＞ヒトの左頭頂骨～後頭骨の破片である。形態小異変のラムダ小骨がみられる。骨２、骨３と接合する。

＜骨２＞ヒトの前頭骨の破片であるが、左右頭頂骨の一部が接合する。骨１、骨３と接合する。

＜骨３＞ヒトの右頭頂骨の破片である。骨１、骨２と接合する。

＜骨４＞ヒトの下顎骨の破片である。左側の第1小臼歯～下顎枝部が残る。左下顎第２小臼歯が未萌出、第１・２大臼歯が植立する。また、第３大臼歯の歯冠が形成途中であることが観察される。

＜骨５＞ヒトの右大腿骨の未化骨で外れた遠位骨端骨である。一部破損する。

＜骨６＞ヒトの右上腕骨の遠位端である。遠位骨端骨は、未化骨で外れる。

＜骨７＞ヒトの左上腕骨である。遠位端が欠損する。なお、近位骨端骨は未化骨で外れる。

＜骨８＞ヒトの左鎖骨である。胸骨端側が欠損する。

＜骨９＞ヒトの左大腿骨である。近位端が欠損する。また、遠位骨端骨は未化骨で外れる。

＜骨10＞ヒトの右頬骨～上顎骨である。

＜骨11＞コウイカ科の貝殻（外套膜背面の筋肉内にある舟型で石灰質の甲）であり、破片となっている。

＜骨12＞ヒトの左第３中足骨である。ほぼ完存するが、遠位端の化骨化が弱い。

＜骨13＞ヒトの左第２中足骨である。遠位骨端骨が未化骨で外れる。

＜骨14＞ヒトの肋骨の破片である。

＜骨15＞ヒトの右大腿骨である。近位端が欠損する。また、遠位骨端骨が未化骨で外れる。

＜骨16＞ヒトの仙椎の破片である。

＜骨17＞ヒトの左踵骨の破片である。

＜骨18＞部位不明の破片である。

＜骨19＞ヒトのほぼ完存する基節骨である。近位骨端骨が未化骨で外れる。

＜骨20＞ヒトの尺骨の骨体片である。

＜骨21＞ヒトの左橈骨の未化骨で外れた遠位骨端骨である。

＜骨22＞部位不明の破片である。

（４）考察

出土した骨は、骨11はコウイカ科の貝殻（舟型で石灰質の甲）片、骨１～10・12～17・19～21がヒトの骨に同定された。骨18・22は破片であったため、種類を特定できなかった。

骨11のコウイカ科は、遺跡の立地環境を踏まえると、当時の人間活動に伴い、堆積物中に取り込まれたものである可能性がある。

コウイカ科以外の骨は、ほとんどがヒトの骨であった。部位は、頭蓋や主要四肢骨などからなり、重複する部位が存在しないことから、おそらくは同一個体のものと考えられる。頭蓋の主要３縫合（冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合）は内側および外側とも閉じておらず、四肢骨の骨端が未化骨で外れていた。頭蓋の主要３縫合は熟年になると内側が閉じてくる。

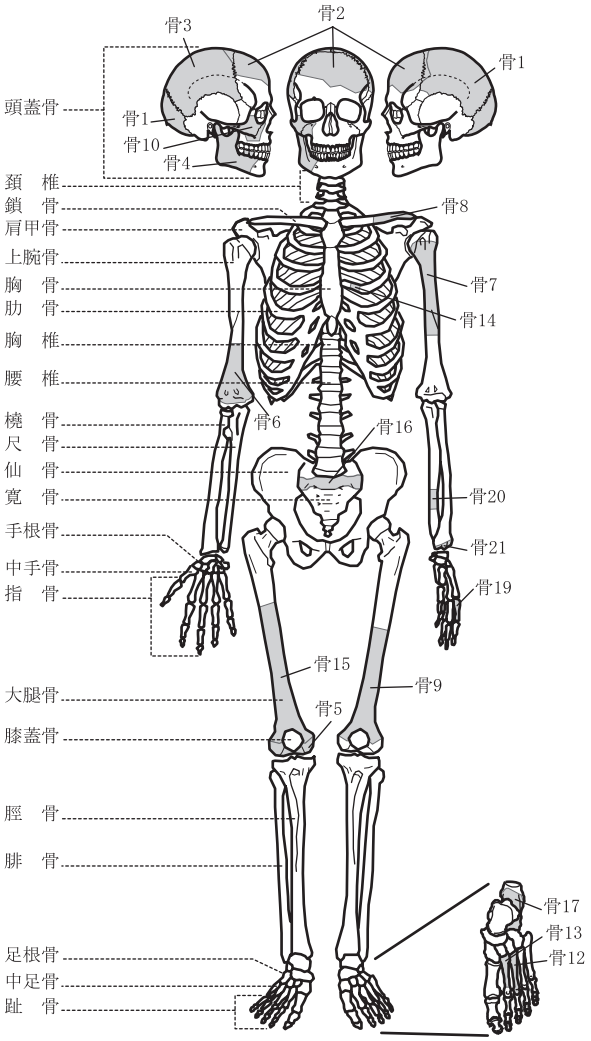
また上腕骨や大腿骨の骨端は16～23歳程度で癒合するとされている。このことから、頭蓋や四肢骨は16～23歳以下の年齢の個体のものと判断される。一方、下顎歯牙の状況をみると、乳歯が確認されていないが左第２乳臼歯の歯槽が開放し、第２小臼歯の未萌出状態にあった。また、第１大臼歯は植立しているが、第２大臼歯が萌出途中にあり、第３大臼歯が歯冠部形成途中にあった（第７表）。このような歯式の特徴は、10～12歳後半程度の小児にみられる特徴である。

以上のことから、出土した人骨は、同一個体の可能性があり、そうだとすれば、10～12歳後半程度の小児の骨で、火熱の影響を受けた痕跡が認められないことから、土葬された骨と推定される。なお、この年齢頃の人骨は形質的特徴から性別を特定することが難しく、今回も判断がつかない。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

【註】

① 『一般国道安乗港線道路特種改良事業に伴う西殿遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1992年



網掛け部が出土部位を示す
（骨14・骨20の左右および位置は任意）

第７図　　人体骨格各部の名称と出土部位

試料名	分類群	部位・部分	状態	備考
骨１	ヒト	左頭頂骨～後頭骨	破片	骨２・３と接合
骨２	ヒト	前頭骨	破片	骨１・３と接合
骨３	ヒト	右頭頂骨	破片	骨１・２と接合
骨４	ヒト	下顎骨	左P1～下顎枝部	P2未萌出，M1・2植立，M3形成
骨５	ヒト	右大腿骨	遠位骨端骨	骨15と同一骨
骨６	ヒト	右上腕骨	遠位端	遠位骨端骨未化骨外れ
骨７	ヒト	左上腕骨	遠位端欠	近位骨端骨未化骨外れ
骨８	ヒト	左鎖骨	胸骨端側欠	
骨９	ヒト	左大腿骨	近位端欠	遠位骨端骨未化骨外れ
骨10	ヒト	右頬骨～上顎骨	破片	
骨11	コウイカ科	貝殻	破片	
骨12	ヒト	左第３中足骨	ほぼ完存	遠位骨端骨化骨化弱
骨13	ヒト	左第２中足骨	ほぼ完存	遠位骨端骨未化骨外れ
骨14	ヒト	肋骨	破片	
骨15	ヒト	右大腿骨	近位端欠	遠位骨端骨（骨５）未化骨外れ
骨16	ヒト	仙椎	破片	
骨17	ヒト	左踵骨	破片	
骨18	ヒト	不明	破片	
骨19	ヒト	基節骨	ほぼ完存	近位骨端骨未化骨外れ
骨20	ヒト	尺骨	破片	
骨21	ヒト	左橈骨	遠位骨端骨	
骨22	ヒト	不明	破片	

凡例）　P：小臼歯　　M：大臼歯

第６表　　骨同定結果

部位	右								左								備考
上顎	M^3	M^2	M^1	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2	M^3	第２小臼歯未萌出（歯根未形成） 第１大臼歯植立 第２大臼歯萌出途中 第３大臼歯歯冠部形成途中
				dm2	dm1	dc	di2	di1	di1	di2	dc	dm1	dm2				
下顎				dm2	dm1	dc	di2	di1	di1	di2	dc	dm1	dm2				
													△				
	M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3	
													●	○	○	●	

凡例）○：歯牙植立　□：遊離歯牙　△：歯槽開放　●：歯牙未萌出　■：未萌出遊離歯牙　－：歯槽吸収

第７表　　出土人骨の歯式

第６章　調査のまとめ

１　ＳＫ５出土の土師器皿について

ＳＫ５からは、実測できたものだけでも10枚の土師器小皿が出土した。これらは、南伊勢系土師器の系統をひくものと考えられ、江戸時代以降のものと考えられる。これらは、まとまって出土したことと、食器として使うには直径が６㎝前後と小さいことから、何らかの祭祀に伴う遺物である可能性が考えられる。

これらの出土したＳＫ５は、旧南張小学校から100ｍほど南西にある畑地西側の調査坑65番で確認した。この畑の近くには、かつて村社八柱神社があり、明治41年に楠御前神社と合祀している[①]。江戸時代の南張集落の図面である「南張村絵図[②]」（第８図[③]）を見ると、集落内には鳥居が２箇所書かれている。１つには「楠之宮」の註記があり、場所も現在の楠御前八柱神社の位置と考えられる。そうすると、もう１つの鳥居の位置が、合祀前の八柱神社と考えることができ、この絵図の成立時期にはこの場所に神社があったことが伺える。

「南張村絵図」の作成年代については、浜島町史に、「年記、庄屋名がなく書写年代は不明であるが、寺（徳林庵）が湯夫川以南の楠の宮の隣接地に描かれている。徳林寺の寺伝によると、享保19年（1734）に風呂屋敷から現在地の井坂に移転したと伝えられている。（中略）これらから推察するに、享保11年の南張村指出帳を鳥羽藩に提出する際、絵図の提出を求めているから、この年に描かれたものが村控えとして残されたものだろう。」とされている[④]。

発掘調査場所が狭く、現時点での断言はできないが、ＳＫ５がこの神社に関係する遺構である可能性を考える必要があろう。

２　人骨の出土について

調査坑22からは、人骨が出土した。同定により、これらはほぼ同一個体のもので、10～12歳後半程度の小児で、性別は不明、火熱の影響を受けた痕跡がないことがわかった。

志摩市阿児町国府の西殿遺跡では、現在の海岸から200ｍほど入った隆起海食台地の麓に26体の人骨が確認され、中世から近世初頭にかけての墓地であったと考えられている[⑤]。今回確認した人骨は、重機掘削時のものであったため、出土遺構や層位が確認できず、いつごろのものかも確認することができなかった。しかし、西殿遺跡の状況を考えると、周辺に墓地が広がっている可能性もあり、今後の注意が必要である。

３　結語

今回の調査は、調査坑の幅が狭く、攪乱を受けていた部分も多かった。しかし、集落北半の大部分を調査することができた。その結果、ほとんどの調査坑から中世から近世にかけての遺物が出土し、南張貝塚が集落全域に広がっていることを確認できた。また、旧南張小学校の西及び南西一帯には、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構が確認できた。

江戸時代の「南張村絵図」を見ると、合祀前の八柱神社と考えられる神社の東側は「八王子畑ノ内」とされ、建物が描かれていないことからも畑地であったと考えられるが、それ以外の所では、現在の集落とほぼ同じ範囲内に多くの建物が描かれている。

第２章で触れたように、南張地区は、江戸時代には現在に近い規模をもつ集落であったと考えられている。今回の発掘調査では、中世以降の南張地区の歴史の一端を知ることができた。　　（西村）

【註】

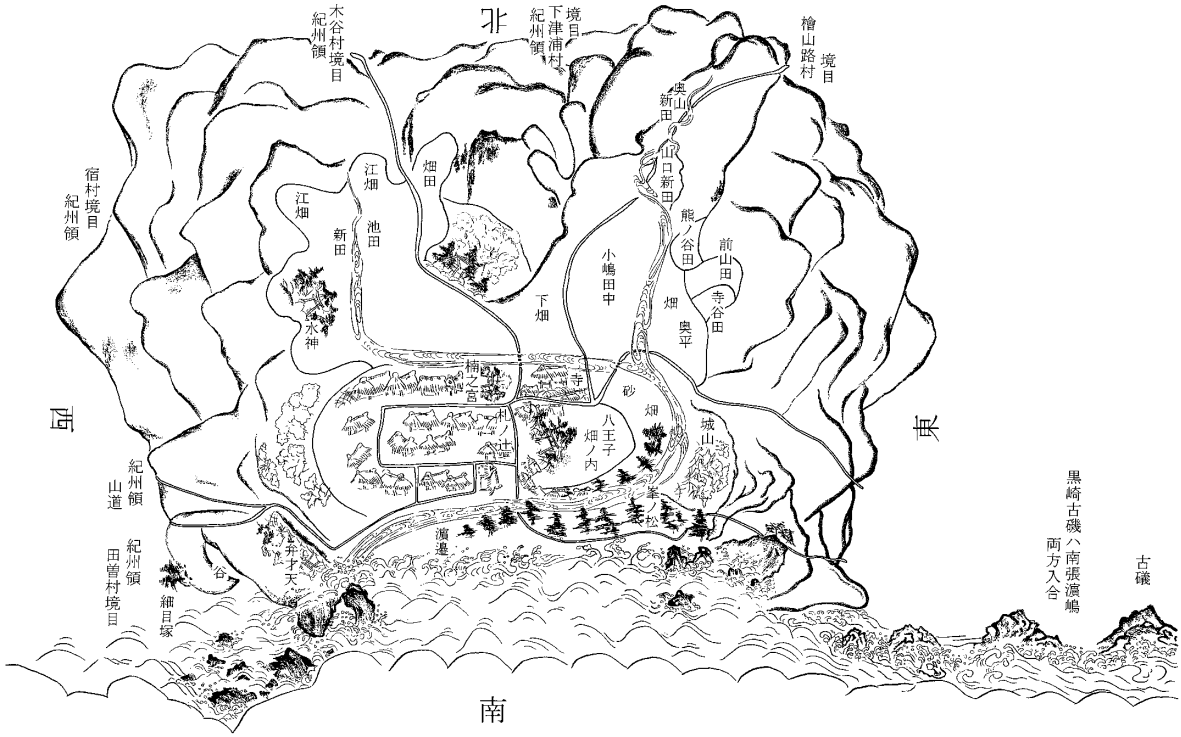
① 『浜島町史』浜島町史編纂委員会　1989年

② 上記①収録

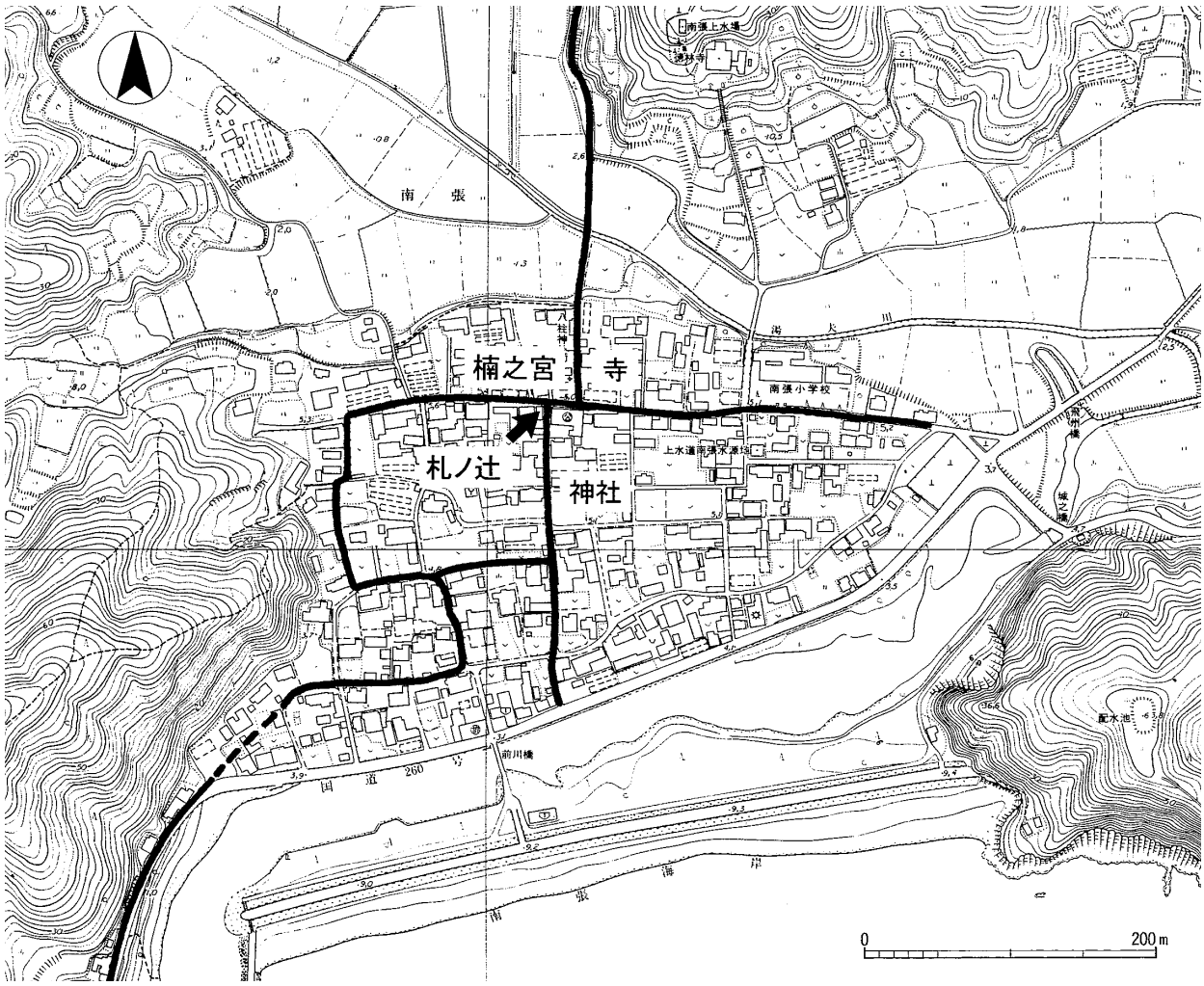
③ 第８図は、『浜島町史』収録の図面をトレースし、地名等を貼り込んだものである。

④ 上記①の「村絵図の解説」による

⑤ 『一般国道安乗港線道路特種改良事業に伴う西殿遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1992年



第８図　　江戸時代後期の南張村　［「南張村絵図」をトレース、地名等貼り込み ］



第９図　　江戸時代の道等の復元案（1：5,000）［「浜島町全域-18」1：2,500　1972年　浜島町　より作成 ］

写　真　図　版

ＳＤ１・２（南東から）

調査坑49小穴（北東から）

写真図版　２

ＳＫ３（北西から）

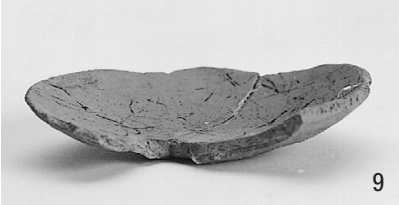
ＳＫ３断面（北西から、上の写真より掘り下げられている）

ＳＫ５（東から）

作業風景

写真図版　4

8


9

10

11

14

58

27

46

59

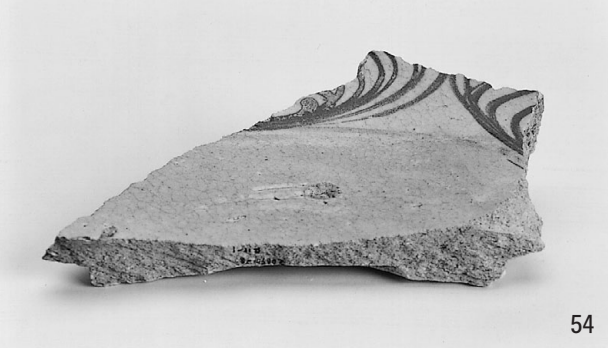
1

5

41

56

50


54

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	なんばりかいづか(だいいち、に、さんじ)はっくつちょうさほうこく
書名	南張貝塚（第１、２、３次）発掘調査報告
副書名	－三重県志摩市浜島町南張所在－
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	317
編著者名	西村美幸　木本勝己
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　　TEL　0596－52－1732
発行年月日	2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
なんばりかいづか 南張貝塚 （第１次調査）	みえけんしましはまじまちょう 三重県志摩市浜島町 おおあざなんばり 大字南張	215	a18	°34 ′18 ″23	°136 ′ 43 ″ 16	20080206 ～ 20080312	88㎡	平成19年度中山間地域総合整備事業（広域連携型）志摩地区による集落内排水整備
なんばりかいづか 南張貝塚 （第２次調査）	みえけんしましはまじまちょう 三重県志摩市浜島町 おおあざなんばり 大字南張	215	a18	°34 ′18 ″23	°136 ′ 43 ″ 16	20080422 ～ 20080702	535㎡	平成20年度中山間地域総合整備事業（広域連携型）志摩地区による集落内排水整備
なんばりかいづか 南張貝塚 （第３次調査）	みえけんしましはまじまちょう 三重県志摩市浜島町 おおあざなんばり 大字南張	215	a18	°34 ′18 ″23	°136 ′ 43 ″ 16	20081119 ～ 20090323	739㎡	平成20年度中山間地域総合整備事業（広域連携型）志摩地区による集落内排水整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南張貝塚 （第１次）	集落跡	鎌倉・室町・江戸	なし	陶器（総重量0.02 kg）	
南張貝塚 （第２次）	集落跡	鎌倉・室町・江戸	溝、土坑、小穴	土師器、陶器、磁器等 （総重量5.30 kg）	
南張貝塚 （第３次）	集落跡	鎌倉・室町・江戸	なし	土師器、陶器、磁器、骨等 （総重量3.35 kg）	１体分と思われる人骨が出土した

要約	南張貝塚は、南張川と湯夫川の合流部にできた海岸の砂堆上に立地する。今回の調査は、排水管設置に伴う調査であったが、旧南張小学校の西や南西を中心に、鎌倉時代から江戸時代にかけての遺構、遺物を確認した。

三重県埋蔵文化財調査報告　３１７

南張貝塚(第１、２、３次)発掘調査報告
－三重県志摩市浜島町南張所在－

２０１０（平成２２）年3月

編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター

印刷　　光出版印刷株式会社